

In Search of Norman Rockwell's America

ロックウェル、リヴォーリ… ふたりの「アメリカ」



さて私たちの中には、ロックウェルという画家のことをよく知らなくても、「こんな感じの絵は見たことある」という人がかなりいると思います。惜しいことに、アトリエの火災により、彼の戦前のかなりの作品が焼失してしまいました。彼の作品の多くはアメリカ本国にあるノーマン・ロックウェル美術館が所蔵しており、彼の油彩の原画などにはなかなか出会うことができません。しかし、様々な媒体を通して、ロックウェルの作品世界は、私たちの中に根付いています。

日本でも、某百貨店の紙袋などにサンタの絵が使われたり、カレンダーや版画やグッズ類の絵柄になつたりして私たちになじみがあると思います。アメリカ本国でも、「サタデー・イブニング・ポスト」など雑誌の表紙絵や、様々な広告を手がけることでその作品世界が人々に受け入れられていきました。つまり、美術館でありがたく作品をおがめる有名画家ではなく、さまざまな媒体を通して日常生活に浸透する、という形をとって、私たちになじんでいった画家であったと言えます。そしてその事はリトグラフやコロタイプなどの版画を含めた、印刷など複製の文化がいかに美術の浸透に大きな役割をはたし、それ自らも重要な芸術作品たり得るかを示しているように思います。

それほどまでに彼のイメージが私たちを惹きつけるのはなぜでしょう。先にのべた、そこに生きる人々の互いの関係、それが全体として肯定的なものであり、人間愛を根底においているからではないでしょうか。ちょっと哀切に満ちていても、明日への希望がある。幸せは、きつといつか訪れる。そんな人々の前向きな精神があるように思います。そして、それ自体が古き良きアメリカの精神であり、国境を越えて人々の心をあたたくする健全な精神なのかもしれません。社会全体に閉塞感漂う今日のごころ、ロックウェルとリヴォーリの作品に接すると、「今の生活にも、幸せがみえるかもしれない。」「明日もまた、がんばってみよう」という気持ちになるかも… しません。

(中川原有紀)



◀上から

ノーマン・ロックウェル〈トミーのドラム〉 1921年 油彩、キャンパス
©1921 SEPS

ノーマン・ロックウェル〈たくさん召し上がれ(生活の自由)〉 1972年 カラーリトグラフ
©1972 SEPS

ケヴィン・リヴォーリ〈感謝でいっぱい〉 1996年
Photo ©Kevin Rivoli